

「リトリート in 伊香保」のご報告

平成26年11月8日(土)および9日(日)に、伊香保温泉森秋旅館並びに群馬大学伊香保研修所にて「リトリート in 伊香保」を行いました。

今回は、プレ履修者研究支援プログラム・ポスター発表会に加え、外部評価委員として東京大学大学院 医学系研究科 神経細胞生物学分野教授の岡部繁男先生と山梨大学大学院 総合研究部 医学域基礎医学系 薬理学講座教授の小泉修一先生をお迎えし、評価をいただくほか特別講演もお願いしました。

以下はその報告です。



○第1日目(11月8日)

①平成26年度プレ履修者研究支援プログラムプロジェクト審査会

4分間の口頭発表後、3分間の質疑応答という形式で11名が発表しました。緊張のうちに発表の持ち時間が終わり、ホッとする間もなく鋭い質問が飛び、始まって早々にも関わらず会場は白熱しました。



②群馬大学大学院 医学系研究科 神経生理学分野3年 澤田悠輔さんの講演

MD-PhD コースから卒前・卒後一貫 MD-PhD コース正規履修者の1期生として常に先頭を行く先輩としてお話をしてもらいました。初期臨床研修と大学院授業の両立など、プレ履修者にとって現実的で参考になるお話を聞くことができました。



③東京大学大学院 医学系研究科 神経細胞生物学分野教授 岡部 繁男先生の特別講演

演題「私の基礎医学-脳、かたち、ダイナミクス」

岡部先生には、学部生時代から研究室に出入りし、学部生時代はネガティブデータばかりで苦労したが、大学院に入ってその経験が生きて、微小管の軸索輸送の研究で大きな成果が得られた話から、自閉症モデルマウス脳に関する最新の研究成果まで、一貫して「現象の可視化」を要とするご自身の



研究について、お話しいただきました。“Don't do fashionable research.”という M. Delbrück の言葉は学生に大きな印象を残したようでした。

※第1日目 日程終了後

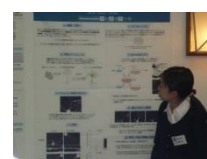
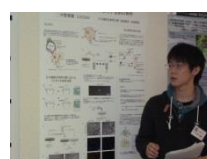
学生と一部の教員が群馬大学伊香保研修所に移動し、所内の「黄金の湯」で汗を流した後、楽しく夕食をいただきました。引き続いて行われた懇談会では岡部先生・小泉先生も合流され、夜が更けるまで研究について熱心な討論と歓談が続きました。途中、この季節に行っている「河鹿橋のライトアップ」に徒歩で出かけ、真っ盛りの紅葉も堪能できました。



○第2日目(11月9日)

①ポスター発表会

発表者6名が3分間のショートプレゼンテーションと2分間の質疑応答を順番に行い、先生方が審査を行いました。前日の口頭発表と違い発表者と聴衆の距離も近く、緊張感の伝わる中で発表が行われました。



②山梨大学大学院 総合研究部 医学域基礎医学系 薬理学講座教授 小泉 修一先生の特別講演
演題「私の基礎医学2 脳科学のニッチから:誰も興味がなかったグリアとATP」

小泉先生には、研究開始時にはご自身でもあまり興味がわからなかったシグナル伝達分子としての ATP の作用の解明と、それまで脇役としてしか考えられていなかったアストロサイトが実は大きな役割を担っていることを明らかにしたご自身の研究をご紹介いただきました。特にアストロサイトが機能



を果たす上でシグナル伝達分子としての ATP が重要な役割を担っていることを明らかにされた過程は、学生にとってもスリリングに感じられたようでした。

③プレ履修者研究支援プログラム採択者の発表及び優秀ポスター賞表彰式

・プレ履修者研究支援プログラム採択者の発表

11名全員の研究を採択とし、特に優秀だった6名には研究支援費の増額を行いました。

・ポスター賞表彰式

6名全員にポスター賞を授与し、このうち1名に最優秀ポスター賞を、2名に優秀ポスター賞を授与しました。

最優秀賞 増田真之佑君



優秀賞 館野達哉君



優秀賞 伊佐治千明さん



④外部評価委員による講評

(1)東京大学 岡部繁男先生(「今後への期待」のみ抜粋)

プレ履修生の数、研究の質、各自の熱意、といった点はいずれも高く評価でき、卒前・卒後一貫 MD-PhD コースは将来性の大きいプログラムであると考えます。更にこの教育プログラムを大きく展開するためには、医学部の学生全体に基礎研究医の重要性を認知させ、通常の医学部教育カリキュラムの中で研究マインドを養成するための企画を頻繁に行うことが大切であろう。より多く



の学生がこのような活動を認識し、一定の興味を持てば、より大きな母集団の中から直接の基礎進学者の増加や、一旦臨床に進んだ医師の研究への回帰を促進することができる。またプレ履修生に対しては、この卒前・卒後一貫 MD-PhD コースで学んだことは、臨床医となった後にも活用可能で、必ずそのキャリアの一定の時期に生きてくる、という事を認識させる事が重要だと考える。今後は基礎研究と臨床研究の境界はむしろ次第に消失していくと予想する。将来に向けて”bench to bedside”だけではなく、”bedside to bench”の医学研究を担う人材を養成するという意味において、群馬大学で行われている卒前・卒後をカバーする教育システムの果たす役割は大きい。

(2)山梨大学 小泉修一先生(「今後の改良点」のみ抜粋)

・学生の発言が少ないように思った。教員が先に発言してしまっていたために、学生が質問、コメントするタイミングを逸していたのかもしれない。



・発表時間が短い。せめて10分程度の発表時間があると、もう少し彼らの研究状況を深く知ることができたかと思う。これは、スケジュールの都合上、仕方のない部分もあるが、今後は是非検討していただきたい。

・本コースの周知の徹底。学生はもちろん、直接指導する教員、ポリクリでコース学生を受け入れる教員に、本コースのシステムや重要性を十分周知していただき、コース生が、これまで以上に堂々と研究できる環境を整備することが必要であると感じた。

2日目の朝、研修所にて



全日程を終えて